

## 中世イランの将棋書

足 利 惇 氏  
伊 藤 義 敬

イラン（ペルシア）とわが国との関係は正倉院の御物も示しているように古来なかなか深くかつ密接ではあるが、地域的に遠く隔たっている関係もあつて、特別にそれと指摘されねばわからぬ場合が少くない。しかし今はそのような細部に立入るべき場合でもないので、ここでは中世ペルシア語書「ブダヒシュン」(Bundahišn-GrBd.と略記)中の一節を訳出して、一、二を指摘するにとゞめよう。この書のなかには、つぎのような記事がある。

その果実が食用として人に歓迎せられ且つ多年生なるもの、例えば棗椰子 (xurmay), キナール (kinār) ①, 葡萄 (angūr), マルメロ (be-h), リンゴ (sep), レセン (vātrang), 柘榴 (anār), 桃 (šaft-ālūk), テニンクワ (mūrt), イチジク (anjīhr), 胡桃 (gūč), 巴旦杏 (vātām) その他この種のごときものは、人これを果樹 (mēva) とよぶ (GrBd. 116<sub>11-14</sub>)。

ここにはわれわれに親しい、西域系統の植物名が出ており、なかには邦音語に近いものがみえる。そのうち、イチジクは Frāhang ī pahlavīk (Fr. Pahl.と略記) オ四章では anjīr とする形でみえており、葡萄の中世ペルシア語には angūr のほかに、その語原と関連するかにみえる bātak がある。尤も bāk は果実酒 ② の意味であるが、その古代語形 \* bāta (ka) - は古代ペルシア語 bātu-gara- “酒盃” のなかに、同族語形を有しているのではないかとみられているものである。しかもみならず、胡麻のように西南アジアと深い関係にある物産が、その他のものとともに、表記法上の特別な取扱いをうけている点にも、格別な背景のあつたことが伺われて興味がある。すなわち、GrBd. 118<sub>1-3</sub> にて胡麻 (kunjīt) やオリーブ (zait) が油脂植物として分類されていることは当然であろうが、その胡麻やオリーブが FrPahl. オ四章にて、それぞれ smy および k smy として出ていることは、注目に値いしよ

う。šm̄ȳ はアラム語 šumšum “胡麻” (Syr. šumš<sup>o</sup> mā, Accad. šamaššanu Arab. simsim—Engl. sesame) の, k šm̄ȳ は同じくアラム語 š<sup>o</sup>min “脂” (Syr. š<sup>o</sup>men, Hebr. šm̄xn, Accad. šamnu, Palmyr. šmn<sup>o</sup> —頭字 k はこの語詞の直前にある kāh “わら, くさ” の k に誤つて由来したものであらう) の省略形であつて, 末字 ȳ/ya は一種の省略記号である。これらの語詞が何故このような省略形 (アラム語の) で登場しているかというに, アッシロ・バビロニア時代からハカーマニシュ王朝時代を通じて, それらが交易などの対象となつて盛んに契約文書等に記載された物資に属するという点から, その理由を説明しうるのではないかとみられているので, これによつても, われわれに親しい胡麻などの物産が西南アジアで果していた役割の一端を想察することができよう。Fr Pahl. オ五章では, xurmāy “棗椰子” も t̄ȳ すなわちアラム語 t<sup>o</sup>martā の省略形であらわれているのみならず, may “酒” (註2 参照) さえも写本 J には<sup>3</sup> sȳ すなわちアラム語<sup>a</sup> sīsa の省略形であらわれているのである (次のアラム語は hamrā である)。植物ばかりではなく, バザーとかキヤラパンのような物名などもイラン起源であるが, これも案外知られていないのではなからうか。

さてそのイランであるが, 近年いろいろな観点からそれが異常な関心を持たれるようになり, 相次ぐ学術探險がわが学界からもこの国に対して試みられるようになった。そしてそれなりにいろいろな成果がもたらされ, 或いは発表されているのは欣快にたえないが, それにもかかわらず, イランの埋れた過去の文学に深く沈潜しこれに発掘の鋤を入れようとするものがそれほど多くなつたとも思われたいのは, どうしたことであるうか。筆者はそれがイランを知ろうとするうえに一つの盲点とならなければ幸いとすものである。こうしたところから, ここには中世ペルシア語, いわゆるパフラヴィー語 (Pahlavī) で伝えられている説話文学の一として表題のごとき書を紹介するとともに, それに附帯する二, 三の問題にも触れてみようと思うのである。

デンマークの故クリステンセン教授 (A. Christensen) はその名著 Hel-tedigtning og Fortaellingslitteratur hos Iranerne i Oldtiden, København 1935 のオ五章 “サーサーン朝の説話文学” において正しく

指摘しているように、同王朝期の説話文学にしてハフラヴィー語で今日伝存しているものとしては、「アルターイ・ウィーラーズの本」(Artāy Virāz Namak)とか、「ジャーマースブの伝記」(Agyātkār i Zāmāspik), 「フリヤーナ家のヤウイシュトの解説」(Mātiyān i Yavišt i Friyān)など(最初の二つは宗教伝統に取材し、最後の書はむしろ知恵の文学に属するもの)を除けば、わずかに三篇を数えるのみである。すなわち「ザレールの伝記」(Agyātkār i Zarērān), 「ハーバクの子アルタクシェールの行伝」(Kārnāmak i Artaxšēr i Pāpakān)および「チャトラング(将棋)の解き明し」(Vičārišn i Čatrang)がそれである。

これら三書のうち、「ザレールの伝記」はザラスシュトラ教徒ウイシュトースブ王と、かれにその信仰放棄を迫る異教徒アルジャースブ王との宗教戦争舞台とし、そこに登場する諸英雄の行蹟を迫力ある筆致で描く、説話文学というよりもむしろ叙事詩的文学というべきもので、中世語にて現存する中世文学の一の傑作である。しかもこの書に描かれる環境と精神とは、マケドニア征服の崩壊後再び形成されたイラン的英雄理念を映発させるものであり、アルシヤク王朝時代のものである。もちろん、流布本はパールス方言を基調としているが、バルティア方言を完全に駆逐し去るには至っていない。現在本は古いバルティア語版を、パールス語を以つて蹟案のうえ書き改めたものである。本書に描写されている兵役制度のごとき、アルシヤク王朝の最盛時を彷彿させるものといわれているのも、理由のないことではない。この書は、アヴェスタのヤシュト諸巻に見える古代イランの叙事詩とは、たとい形式は異つていても、響きは同じものを伝えているのであり、やがてダキーキーとフェルドウシーによるシャーフナーメのなかにその一新版を見出そうとする、いわば一種の中間楔子と称することができよう。

これに対し、オ二の書「アルタクシェールの行伝」はサーサーン王朝の開祖たる同王以下シャーフブフルー世およびオーフルマズド一世に至る三代の行伝であるが、主役はもちろん開祖である。流布本の前に原本があり、それが書き改められたことは前書と同じであるが、方言的にはこの場合は原本もパールス方言であつたことはいうまでもない。史実に即した面もあるが、時

代錯誤を犯してはるか後代の事実を開祖の時代に持ち込んでいる場面もあり、その他龍退治とかそれに用いられた殺害形式（熔鋌を吞ませて倒す）などのような古い印欧的素材をも織り込んでいるところから、叙事詩文学のような盛り上りは期待できないとしても、説話文学としてさまざまな角度から研究の対象となるに耐えることができるであろう。

残るところは本論の主題たる最後の書「チャトラングの解き明し」であるが、本書は上に挙げた原名のほかに、Mahtiyān i Ča trangなどともよばれている。意味は、強いて異を求むれば、「チャトラングの解説」とでも称すべであろうか。これも一応は説話文学のジャンルに入るが、本質的にはむしろ「知恵の文学」とみるべきものであろう。

ペルシアの典拠に依つたクセノポーンはその「キウールー・パイダイアー」八巻七章一～二八節において、クールシュ大王をして臨終に遺訓を語らしめているが、一八～二一節のように作者の創作に成るソークラテースの見解は別として、かゝる遺訓をのこすという行き方はシャーフナーメにも類似の行き方を見出すところであつて、全くイラン的であるといえる。そしてわれわれにとつて特に重要なことは、それが広い意味における知恵の文学とみられる内容をもつているということである。そういう性質の文学としては、ハカーマニシュ朝諸王の碑文中にもこれを求めることができ、なかでもダーラヤワフシュ一世のナクシェ・ロスタム碑文bの如きはその最たるものであろう。このような傾向はイランのみでなく古代前アジアに見出されるもので、アッシロ・バビロニア人もこの種のジャンルを有し、旧約聖書にも「箴言」中にソロモンの箴言、ヤゲの子アグルの語なる箴言、レムエル王のことばなどが載録されており、ペン・シラクのそれも広く知られているところである。それらのうちの一として、その古さにおいて指を屈せられるべきものの一つはおそらく「アヒカル物語」であろう。というのは、スラヴ語その他の諸語で伝えられ、その古さの限界もさだかでないこの物語が西暦前五世紀のエレバンティネー・バビルス中にアラム語版を提供するに至つたからである。断簡であるうえに後半を欠いているのは惜しいが、解説しうる部分も相当あるのみならず、殊に興味深いのは、その随所にイランの香りを漂わせていると

とである。例えば A. Cowley: Aramaic Papyri of the Fifth Century B.C., Oxford 1923, p. 205f. ③ の挙げている諸イラニズムのほか、そのオ一二六行をも加えることができよう。

'al-tidrag qast-āk w<sup>o</sup>-'al t<sup>o</sup>harkeb h<sup>a</sup>t-āk l<sup>e</sup>-šaddiq  
 l<sup>e</sup>-mā 'lahayyā y (isg<sup>o</sup>) be-<sup>a</sup>ad<sup>o</sup>r-eh w<sup>o</sup>yah<sup>a</sup>tibinna-hi  
 'a<sup>o</sup>l-āk

汝の弓を絞つて汝の矢を義者に放つことなかれ、おそらく神はかれを助けに來りて、それを汝に立ちかえらすであろう。

E. Herzfeld: Altpersische Inschriften, Berlin 1938 p. 220 (尚お同氏の Archaeologische Mitteilungen aus Iran VII p. 95をも参照)の指摘しているように、"vielleicht kommt ihm der Gott(!) zu Hilfe" ('lahayyā yisg<sup>o</sup> be-<sup>a</sup>ad<sup>o</sup>r-eh)をみるに、s<sup>o</sup>ga は古代ペルシア語碑文の ay- "行く" に対するそのアツカド語訳に登場する訳語詞であり、しかもパフラヴィー語では raftan "行く" のウズワーリジュン (uzvarīšn ← 表意語詞) として用いられているものであり、その古代語形は rap- "助ける"、rafnah- "援助"、rafədrāi "助けに" (不定法) 等々にみられるものである。その yisg<sup>o</sup> be-<sup>a</sup>ad<sup>o</sup>r-eh "かれを助けに來るであろう" はイラン的といいうるほどにイランと密接な関係をもつたアラマイズムといえるであろう。

さてこの物語の筋は舞台をアッシリアの王サンヘリブとその子アサルハドンの宮廷にとつている。アヒカルはその高才賢智の宰相である。老齡となつたので、かれは代つて甥ナダンを後任に推挙したところ、そのナダンのために却つて讒訴されて死を宣告される。しかし、かつてアヒカルが命を救つてやつた貴士に救われて地下の一室にかくまわれる。やがてエジプトのパオが好機とばかりアッシリアに難題をもちかけ、解くことができねばエジプトに三年間入貢すること、もし解くことができればアッシリアがエジプトの朝貢を受けてよいというのである。かの貴士がアヒカルの生きていることを告げるに及んで、かれは地下から連れ出されてこの難問を解いたというのであ

るが、この話のなかにいろいろな箴言や知恵の話、寓話などが織り込まれている。その詞華の二、三を採録してみると、

わが子よ、もし予が汝を打つならば汝は死なぬであろうが、もし予が（汝を）汝の心のままに放置するならば汝は生きぬであろう（八二行）。獅子をおそれて驢馬は荷をすててそれを運ぼうとしない。かれは仲間から蹴りをいただき、且つかれ自身のものでない荷物をいただいで駱駝の荷を背負わされるであろう（八九～九一行）。

汝は心を迷わせぬため（汝の）富をふやすことなかれ（一三七行）。汝の知恵が消されぬため、（汝にとりて）大（にすぎること）を汝は考えることなかれ（一四七行）。

人々が汝を呑むことなからんため、汝は甘くなるなかれ。人々が汝を吐き出すことなからんため、汝は苦くなることなかれ（一四八行）。

もし汝にして、わが子よ、高き身とならんことを願うならば、神の前に汝自身を低くせよ。神は高慢（？）なるものを低くして低きものを高くしたもうのである（一四九～一五〇行）。

豹が山羊に会うたところ、かの女（山羊）はごごえていた。豹は応えて山羊に言うには、来れ、さらば予は汝を予の皮をもつて包んでやろう、と。山羊は答えて豹に言うには、われにとつてそれがどうしたというのだ、わが主よ。わが皮をわれより取りたもうなかれ。何となれば、御身は血を吸う以外に祝福したもうことはないからだ、と（一一八～一二〇行）。

というような類である。最後に挙げた寓話はイソップ寓話を想起させるが、イソップ寓話中にはアヒカル物語に出るものの骨子を繰りかえしたものがあるのみならず、イソップの伝記さえもこのアヒカルの伝記に影響されているのである（S. Moscati: Ancient Semitic Civilizations, London 1957, p. 177）。そしてブール（Buhl: Studier tillegnade Esaias Tegnér den 13 januari, Lund 1918, p. 13 ff. — クリステンセン上掲書 p. 81）は炯眼よく、このアヒカル物語がアッシリアを舞台としながらもアッシリアの原文学にはこの種のものがないことを指摘するとともに、サー

サーン朝期のワズルグミフル (Vazurgmihr) 物語にきわめて類似しているところから、それがイラン起源のものであることを道破した。氏の主張はこの物語のバビロニア起源説を唱えるカウリー (上掲書 p. 206 f.) のように個々の知恵の文学を指しているのではなくして、物語全体のモチーフを指しているのである。

ワズルグミフルというのは伝説上の人物であるが、クリステンセン氏 (Acta Orientalia VIII p. 106 ff.) のように医師ブルゾーエー (Burzōē) を伝説化したものであると主張するひともある。ブルゾーエーというのは梵本 Pañcatāntra をパフラヴィー語に訳出し、さらにそのなかに自作のものを加え、且つそれに序文を載せたとされている人物である。いずれにせよ、ワズルグミフルはイランにおける高才豪傑のヒナガタのようなもので、かれの所談とされる一種のバンドナーマク (pand-nāmak) があるのも当然であろう。バンドナーマクとは「訓誡書」というほどの謂で、別名をアンダルズ (andarz) 「教訓」ともいつて、一連の箴言格言をつらね、しかもそれを高名な人物の所談とした一種の文学書である。さてそのワズルグミフルの物語のことであるが、プールの指摘したものはまさしく、ここに取扱う「チャトラングの解き明し」にみられるものである。そうすれば、かのアヒカル物語とこのワズルグミフルの物語とのモチーフは、優によく上下千年の風雪に耐えてその命脈を保っていたことがわかる。

「チャトラングの解き明し」のチャトラング (čatrang) とはサンスクリット語 catur-āṅga の転訛である。そのことでも明らかのように、インドで案出されたこの遊戯をたゞさえて使節がサーサーン王朝フスロー一世 (531~579) の宮廷に来て難題を提起することから、この物語ははじまるのであるが、この使節を派遣したインドの王が誰であつたかについては諸説が一致していない。テキストに śc s'rm i 'vazurg šahriyar i Hindūkan-šah 「大守にしてインド王なる śc s'rm」とある śc s'rm は、一般には Dev-sār (a) m と読んで Devācarman に擬せられている。この立場は E. Herzfeld: Zoroaster and his World, Princeton 1947, p. 626f. によつてもまた新しく支持され、氏はヤクービー (ya'qūbī, Hist.

97) に出る Dab<sup>v</sup>salim と同一視すべきものであるから Dēvasārm と読むべきであるといっている。この将棋譚はアルタクシェール一世時代の出来事をフスローイ一世時代に移したものであるから、後者と同時代に在世したヤシヨードルマン (Viṣṇu-Vardhana Yaçodharman) と同一視して Yasōdarm と読む必要はない、とにかく通俗譚であるからこれを史的に賦彩することはないというのが氏の立場であろう。氏は J. Marquart (und de Groot) : Das Reich Zābul und der Gott Zūn vom 6.-9. Jh., (Festschrift E. Sachau), Berlin 1915, p. 257 のヤシヨードルマン説を推進してゆくものが J. C. Tavadia であるといっているが、それは誤りで、これは Olaf Hansen: Zum mittelpersischen Vicārishn i Čatrang, Glückstadt 1935 (ここに収載されている文献などは再録しない) で、氏は sc s<sup>v</sup> rm を syw y' rm と改めて yasōdarm と読むことを主張している。

つきにこの「チャトラングの解き明し」の訳文を出す、完全な解読はこれまでにまだ出ていない。テキストおよび科段は The Pahlavi Texts, edited by the late Dastur Jamaspji Minocheherji Jamasp-Asana, II, Bombay 1913, pp. 115~120 に依つたが、紙幅がないためにローマ字本さえ載せえないのは遺憾である。尚お、上記ハンゼン氏の文献中には J. C. Tarrapore: Vijārishn i Chatrang or The Explanation of Chatrang and other Texts, Bombay 1932 は載っていない。

(1) 人々の語るところによると、フスローイ(一世)アノーシャク・ルワーンの治世に、太守にしてインド王なるデーワサルムから、イラン国人の知恵と知識とをためし且つはおのが利益をも願みんがために、緑玉<sup>④</sup>で出来た十六駒と紅玉で出来た十六駒から組み立てられたチャトラング(将棋)が(送られて)来た。(2) かのチャトラングと一緒に、千二百(頭)の駱駝に積まれた金と銀と宝石と真珠と衣裳、九十(頭)の象ならびに貴重な品も一緒に来り、またインドでより抜きされた哲人(tātlitōs < Aristoteles)も共にやつて来た。

(3) 書翰にはこう書かれていた、御身は大王たるの資格 ('sahan- 'sahī-



h)をもつてわれらすべてのものに対しても大王にましますが故に、御身の博士ら(また)われらのそれよりもさらに博識なることが要請される。<sup>⑤</sup>もしこのチャトラングの所 (čim)を解き明したまわばよし、さもなくば貢と税とを(われらに)送りたまえ”と。

(4) 大王は四日(一本三日)の期限を求めた。しかるにイランの博士らのうちには誰一人として、かのチャトラングの所詮を解き明しうるものはいなかつた。

(5) オ三日目にボークタクの子ワズルグミフル (Vazurgmihir i Bōxtarān) が起ちあがつた。(6) そして言うには“<sup>1005</sup>寿長かれ。臣が<sup>⑥</sup>このチャトラングの所詮を今日まで解き明さなかつたのは、つぎの理由によるのである。すなわち、御身とイラン国にあるすべてのものが、イラン国人中臣が最も博識であることを知りたまわんためである。(7) 臣はこのチャトラングの所詮を易々と解き明して貢と税をデーワサルムより取ろう。そして解き明すことのできぬ別のものを一つつくり、デーワサルムのもとに送つてかれより二倍の貢を臣は取ろう。されば御身は、御身が大王たるの資格に値いたまい且つわれらの博士らがデーワサルムのそれよりもさらに博識であることについて、疑惑なからせたまえ”と。(8) 大王は三度び言つた“善いかな、われらが哲人ワズルグミフルよ”と。そしてかれは一万二千ドラクムをワズルグミフルに与えることを命ずるのであつた。

(9) あくる日、ワズルグミフルは哲人を前に呼んで言うには“デーワサルムはこのチャトラングをその所詮において戦場になぞらえた。(10)そしてそれになぞらえて二つの首領 (sarxvatay)をつくつた。(すなわち)かれは(一つの首領たる)王 (sah)を左または右における総将 (matiyān-rān)になぞらえ、(今一つの首領たる)参謀 (frazēn)を軍将 (artēs-tārān sardār)になぞらえ、象 (pīl)を後衛隊長 (puštikpānān sardār)になぞらえ、また馬 ('asp)を騎馬隊長 (asvārān sardār)になぞらえ、歩兵 (payāsak)を先鋒 (pēs-razm)たる同じ歩兵になぞらえたものである”と。(11)ここにおいて哲人はチャトラングをならべてワズルグミフルと差したところ、ワズルグミフルは哲人から三勝を博し、こ

れによつて大なる歡喜が全土に到来した。

(12) ここにおいて哲人は起ちあがつた。(13) そして言うには「寿長かれ。神はこの榮耀と榮光と力と勝利とを御身に与え給うた。御身はイランと非イランとの主にてまします。(14) 幾人ものインドの博士らがこのチャトラングを多くの刻苦と辛酸とを以て組み立て並べたところ、一人として解き明すことができなかった。(15) 御身のワズルグミフルはみずからの生得の知恵をもつてかくもやすやすと且つすみやかに (sapukihā) 解き明した。(16) そしてあれだけの財宝を大王の宝蔵 (ganj) に送り込んだ」と。

(17) 大王は翌日ワズルグミフルを前に召した。(18) そしてワズルグミフルに言うには「われらがワズルグミフルよ。＜臣がつくつてデーワサルムに送ろう＞と汝が予に語つたかものは、いかなるものであるか」と。

(19) ワズルグミフルの言うには「この千年紀のなかでは、アルタクシエールが最も有為且つ博識にましましたので、アルタクシエールの名に因んで組み立てられたネーウ・アルタクシエール (Nēv-Artaxšēr 善きアルタクシエールの謂) なるものを、臣は並べよう。(20) ネーウ・アルタクシエールの盤 (tāxtak) を臣は大地スパンダルマト (Spandarmat) になぞらえよう。(21) そして三十個の牌 (muhrak) を三十日 (三十) 夜に臣はなぞらえ、白の十五を昼に臣はなぞらえ、そして黒の十五を夜に臣はなぞらえよう。(22) 骰子 (gārtānāk) の運動 (tāk) を星辰の前進 (vartišn) と蓋天の転進 (gartišn) に臣はなぞらえよう。(23) 骰子上の一目を臣は、オーフルマズドが唯一者にましまし一切の善きものを創造したもうたるになぞらえよう。(24) 二目を臣は、メーノーク (密界) とゲーテーク (頸界) とあるになぞらえよう。(25) 三目を臣は、善意と善語と善行、或いは意と語と行とあるになぞらえよう。(26) 四目を臣は、人間がよつてもつて成り立てる四つの元素 (amēcišn) 、或いは世界の四維たる東と西、南と北とあるになぞらえよう。(27) 五目を臣は、五光すなわち太陽と太陰と星辰、火および天空より来る電光 (varčak) とあるになぞらえよう。(28) 六目を臣は、庶類がガーサンバル (Gāsanbar 年六回行われる祭典) の六期に創造されたるになぞらえよう。(29) 盤の上にネーウ・アルタクシエールの並べられたるを臣は、庶類を顕

界に創造したもうたときの神オーフルマズドになぞらえよう。(30) 骰子による牌の前進 (vartišn) と転進 (gartišm) とを臣は、鬚界にて紐帯が密界者と結びつけられている人間が七 (遊星) および十二 (宮) とともに常に前進し (vartēnd) 退去しつつあり (vihēzēnd) , 且つ時あれば (それらの星辰が) 相手を打ちて打ち倒すこと、あたかも人が鬚界にあつて相手を打つがごときになぞらえよう。(31) そして骰子の唯一つの回転によつて全部 (の牌) が打ち倒されるときは、人間がことごとく鬚界から逝去するに似ており、また再び並べられるときは、人間が死者の起生に際して悉く生きがえるに似ているのである\* と。

(32) 大王はこのことばを聞いたとき欣喜して、同じ毛色のアラブ馬一万二千、金と真珠を鑲めた王冠 (patēsār) , ならびにイラン国でより抜きの壮士一万二千、七重の鎧一万二千およびインド産鍛鉄の太刀一万二千、七目を備えた帯一万二千ならびにその他一万二千の人馬に必要なとされるすべてのもの—それらをことごとく、えも言えぬほどに飾りたてることを命じた。

(33) ポークタクの子ワズルグミフルはかれらの上に統領とされた。そして選ばれたる日に吉兆と神助の裡にインドに来到した。

(34) 大守にしてインド王たるデーワサルムはそのありさまを見たとき、ポークタクの子ワズルグミフルから四十日の期限を求めた。(35) インドの博士たちのうち、かのネーウ・アルタクシエールの所詮を知っていたものは誰一人いながつた。(36) ワズルグミフルはかの貢と税と同量のもをもう一つデーワサルムより取つて、吉兆と偉耀の裡にイラン国に帰来した。

(37) チャトラングの所詮の解き明しとはこういうことである。すなわち、勝利は神力によるということである。けだし、勝利は、知恵を以てもたらずがためには、神智ある本質察知力から (得られるもの) であると博士たちも言っているからである。

(38) チャトラングを差すとはこういうことである。すなわち、じぶんの駒を注視し且つ注視することに努め、いかにすれば相手の駒を取ることができるとより多く努めるべきこと、また相手の駒を取ることができるようにと希望して悪手を差さぬこと、且つ常に駒は一つを使つて他は待機させてお

くこと、また十分に気をくばつて注視しなければならぬことやその他のことで、「作法書」(Aṣṣenak Namak)に書かれているがごとくである。

以上で「チャトラングの解き明し」は終つているが、文尾に見える「作法書」というのは騎御とかポロのような遊戯などに関する作法やルールをかいたもので、封建制下には重視されていたものである。原本は散逸した。イブヌ・ル・ムカフファ ('Ibnu 'l-Muqaffa'—760年頃歿)によつてアラブ語に訳出されたが、その間の事情には今は触れない。本書のみならず、他のパフラヴィー語書にもこうした既存今次の諸書が引用されていることが稀れでなく、またかのアン・ナディーム (Muḥammadu bnu 'Ishāqa-'n-Na-dīm)の「キターブ・ル・フィフリスト」(Kitābu 'l-Fihrist—988年成立)をみても、パフラヴィー語からアラブ語に訳出された翻訳文献の膨大さが想見されるが、それらも原本訳本ともに殆んどこれを喪失したことは惜しみても余りあることであろう。これらについては、F. Gabrieli: *L'Opera di Ibn al-Muqaffa'* (Rivista degli Studi Orientali vol. VIII, fasc. 3, Roma 1932)を参照されたい。

さてこのワズルグミフルに関する譚であるが、上に訳出したパフラヴィー語本将棋書のほかにも、フェルドウシーのシャーフナーメやタアーリビーのペルシア王統史にもそれが伝えられている。そして興味のあることには、そのワズルグミフル<sup>⑦</sup>に関する譚のなかに、例の「チャトラングの解き明し」譚が挿入されているのである<sup>⑧</sup>。しかしその底本として用いられたものが現存のパフラヴィー語本であるか、或いはより古い同種本であるかは明らかでない。挿入された形で見出される「将棋譚」の部分は重複するところもあり、またあとで若干取扱うことにもするからそれは省略して、その前後にある部分のみを要約して伝えてみよう。

(ŠnT. p. 2367 ff.; Tha' ālibī p. 619 ff.) フスローイ一世はおのが盃に野猪が鼻をつつ込んで酒をのむ夢をみる。この悪夢を解きうるものはイランにワズルグミフル唯一人である。かれはまだ学童ながら解いて言うには、

王のハーリムに女装の若者がいる。と。王はハーリムのものをして悉く裸か  
 にならせてその若者を見つけ、功によつてワズルグミフルは王の議官となる。  
 …… (Šnt. p.2507 ff.; Tha'alibī p.633 ff.) のちにかれは王の寵  
 を失つて下獄し虐待されて失明するが、たまたまローマ皇帝が封印した函を  
 送り、中味を当てることができなければローマに入貢せよと要求してくる。  
 イランの博士らがみな失敗したあとをうけて、ワズルグミフルが牢獄から引  
 き出されてくる。かれは途上で三人の婦人に会い、質問に対するかの女たち  
 の返事から靈感をうけ、これによつて、函のなかには孔の全通した真珠と半  
 貫通の真珠、および未通の真珠が一個ずつ入っていることを言い当てて再び  
 王の寵を回復し、ローマ皇帝をしてペルシアに入貢せしめるのである。

これをみると、前半はイランの説話によくみられる夢判断のモチーフで  
 あり、これに対し後半はわれわれがこれまで見てきたアヒカル物語やパフラ  
 ヴイー語本「チャトラングの解き明し」にみられるものと全く同じモチー  
 フであることがわかる。要するに、そういう諸種のモチーフを編み合わせ  
 たものである。それでは中略した将棋譚はどうかというと、かのパフラヴィ  
 ー語本がその直接の底本となつていゝることについては一部保留を附し  
 ておいたが、この両者、殊にシャーフナーメとパフラヴィー語本とを比較し  
 てみると異同がある。例えば、例のインド王の名もシャーフナーメでは終始  
 'インドの王' (Rāy e Hindī) というのみで、この王をさらに 'カナウジ  
 の王' (Rāy e Qannūg) とする句はあつても、パフラヴィー語本に出るか  
 の王名をいかに読むべきかを、何等示唆していない。尤も、シャーフナーメ  
 はパフラヴィー語本のチャトラング中に駱駝なる駒の欠けていることを教え  
 ているが、それについては本論の末尾でチャトラングについて略説する際に  
 言及することとし、ここではパフラヴィー語本にみえる Nēv-Artaxšēr につ  
 いてみるに、それが王子らの教養として重視されていたことは「フスロ  
 ーイと童子」 (Husroy u rētak) 一五節をみるも明らかで、そこには文武  
 両道の奥義をきわめた小姓が、王の前に身上を披瀝してつぎのように言つて  
 いる：

u 'pat čatrang u Nēv-Artaxšēr u aštapaš kartan 'hač

hamahlān frāctar 'ham

チャトラングとネーウ・アルタクシエールとアシュタパドとを演じては、われは同僚中第一である。

アシュタパド (astapaḥ) とはサンスクリット語 *astāpada*, パーリ語 *asthapada* の借用語にして, “八つの目 (本義は足) あるもの” の謂であり, 本来はこの戯で使われる盤の名称である (H.W.Bailey: Bulletin of the School of Oriental Studies IX, p.233)。「アルタクシエールの行伝」 (ed. by Noshervān, §22) にも, アルシャク王朝アルタワーン五世に召されてその宮廷に入つた若き日のアルタクシエールがやはりチャトラングとともに, このネーウ・アルタクシエールにも卓抜であつたことが記されている。この一種のスゴク戯 (Nēv-Artaxšēr) がフスローイ一世時代に創案されたという「チャトラングの解き明し」の立場を固執するならば, それを夙くアルタクシエール一世時代におく「行伝」の立場は一種のアナクロニズムとなるが, このような傾向は「行伝」の諸所に指摘することができるから, あえて異とするにも当らないであろう。遊戯がことさらに開祖の名に因んで名付けられたとすれば, (1) 開祖よりかなりの時間が経過したときにおいてであろうと考えることもできる。こういう時代錯誤は何らかの事件や事柄を權威づけようとする際好んで行われた傾向で, かの「タンサルの書翰」などその最も著しい例であろう。この書翰がフスローイ一世時代の成立であるにかかわらず, それを權威づけるためにアルタクシエール一世時代に擬したものであることは学界に広く容認されているところである<sup>⑨</sup>。しかしまた, 開祖に因んで名付けられたが故に, (2) 遊戯の創案が開祖と同時代であることがますます確実であるという風にも考えることができるのである。かかる考え方の根拠は, 例えばシャーフフル一世がその Ka<sup>h</sup> beh-ye- Zārdōšt 碑文において妃 Ātur-Anāhīt の名誉のために同名の聖火殿を建てたことを述べている事実とか, その他諸王がみずからの名に因める都城を建設したりしている事実にあるのである。ところで, シャーフナーメでは, このネーウ・アルタクシエール戯はナルド (Nard) という名で出てくる。ヘルツフェルト氏は終始, この形を Nēv-Artaxšēr の縮約されたものであると主張してい

るが<sup>⑩</sup>、もしも梵本 *Mrcchakatika* II, 7 に出てくる一種のスコロク戯 *nardita* の原辞が *nard* を借用したものであるならば、ナルドの成立はフロイー一世より可成り古い時機に求めることができるであろうから<sup>⑪</sup>、パフラヴィー語本「チャトラングの解き明し」中の出来事をアルタクシェール一世時代に措定しようとする氏の立場は有利となるようにもみえるが、しかし同開祖の時代すでに *Nēv-Artaxšēr* が *Nard* と縮約され、且つそれがインドに借用されるほどポピュラーであつたかは、何ら証明されていないのである。

最後にチャトラングのことであるが、フェルドウシーはワズルグミフルがチャトラングを解き明したはなしを記したのちに、チャトラングの起源についても言及している (*ŠnT.p.2469ff.*)。それによると、ガウ (*Gau*) とタルハンド (*Talhand*) というインドの二王子が王位をめぐつて戦い、タルハンドは陣歿する。そこで王子ガウは博士らをしてこの戦闘を駒を用いて盤上に再現させた、これがチャトラングの起源であるというのである。

チェスの起源や歴史、或いはその発達史上に占めるこのチャトラングの地位などを取扱おうとする意図はないので、上記 *J.C. Tarapore: Vijāriṣṇi Chatrang* によつて極く簡単に二、三のことを指摘するにとどめたい。

さて梵本 *Bhaviṣya Purāna* に出てくるものは、一軍八個の駒から出来た色の異なる東西南北の四軍合計三十二個の駒が骰子によつて輸贏を争つていたもので、王のつぎに象 (I)、そのつぎに馬、そのつぎに舟が位し、且つそれに歩兵が前線に配列されていた。この舟は *Roka* (I) に相当するものなるべく、*Roka* (I) は序盤では端に位し斜めに動いていた。これをみると、象 (I) や馬などチャトラングにおけるものと同じ位置をとつていたことがわかるが、骰子を振つて演ずるのではスコロクの性質に近いので、チャトラングの直接的予型とはなりえない。その後、四組制がすたれて三十二駒を二組に分ける方式となり、その結果、一組中に王を二つ立てることができなくなつて一つが *mantrin* または *frazēn* となつた。顧問官、議官乃至参謀である。ところが、フェルドウシーにおける象 (II) の動き方をみると斜めに動いているので、これは現今のチェスの *Bishop* と同じ動き方である。そうすると、古い象 (I) が *Roka* (I) の位置に来て、動き方はもとのままの象 (I) の動き

方を保ちながら名駒が Roka (II) となり、これに対し、古い Roka (I) は古い象 (I) の位置に来て象 (II) の名を襲いながら、動き方は古い Roka (I) と同じく斜めに動く方式となつてゐることがわかる。現今のチェスの Rook はこの Roka (II) を、名前においても動き方においても、踏襲したものである。しかしインドのチェスでは、この Roka (II) = Rook は依然として象と呼ばれてゐるが、動き方は Roka (II) = Rook と同じである。一方、古い Roka (I) は古い象 (I) の位置に来てインドでは駱駝と呼ばれてゐる。そうするとイランでもこれに相応するものがあるはずであり、事実フェルドウジーは「駱駝」(uštr または šutur) という駒の名を挙げてゐる。しかし、これにおいてはこの間の事情にくらいためか、「象」(pīl) も「駱駝」も同じ動き方をするように記されてゐるのみならず、もう一駒、種類もふやされてゐるのである。そこで、パフラヴィー語本にこの「駱駝」に相応する駒の欠けていることが明らかとなるが、おそらくコピストの誤脱に由るものであろうし、またこの誤脱は、諸写本のいずれにもみられるのであるから、よほど古い時期に起つたものであろう。

尚お、象 (II) (pīl) はその後アラブ語化されて fil または 'al-fil となつてヨーロッパに伝えられ、チェスでは Bishop となつてゐる。

註

① Aram.kinnārā "Jujubenbaum" (Dalman) 参照。—尚お、この論文中、訳文のなかに用いる ( ) は訳者による加筆を示す。

② 下に出す中世ペルシア語書「フスローイと童子」の五七節にも、小姓は天下の名酒として

'may i Harevīk u 'may i Marvrōtik u 'may i Bustīk u  
batak i Harvānik Herāt (E. Herzfeld; Altpersische  
Inschriften, Berlin 1938, p.114 は Gay) の酒と Marvrōt の酒  
と Bust の酒と Harvān (Holvan—アラビア) の果実酒

を挙げ、つぎの五八節では

'be hamvar 'apak 'may i Asurīk u batak i Vazrangīk



hēc 'may patkar 'nēst

しかしAsūr (イラク) の酒とVazrangの果実酒には、いかなる酒も  
ついに匹敵するものがない

と言っている。Frahang i Pahlavikオ五章 (アラム語詞は省く) には  
x<sup>v</sup>arišn (食物) : raz (ブドウ) , angūr (ブドウの房) , xur-  
may (ナツメヤシ) , may (酒) , batak (果実酒) , jam (杯) ,

šakar (砂糖) , x<sup>v</sup>ar (美味) , angmēn (蜜) , x<sup>v</sup>aš (美味なる)

とある。ここにみられる batak の位置も興味があろう。上掲「フスロー  
イと童子」五七節に出る Bust というのは Harahvati (skt. Sarasvati)  
地方にある地であるが、この地方にある Kapiça の酒のことは梵本 Arth-  
aśāstra of Kauṭilya: A New Edition by J. Jolly and R. Sch-  
midt, Lahore 1923, vol. I p. 71, l. 9f. (II 25: 42—中野義照訳, カ  
ウティルヤ実利論 p. 116 参照) にも出ているので、よほど有名であつたと  
みえる。

③ 本書への造試文献としては P. P. Jouān: Notes grammaticales,  
lexicographiques et philologiques sur les papyrus ara-  
méens d'Egypte (Mélanges de l'Université Saint-Joseph,  
Beyruth X<sup>viii</sup>-1934, p. 3ff.) がある。この期のアラム語文書における  
イラニズムについては G. R. Driver: Aramaic Documents of the  
Fifth Century B. C., Oxford 1957 をも参照。

④ 'wzmbwrt uzambrat "緑玉, エメラルド"。New Pers. za-  
marrad (Sahnameh-Wolff's Wörterbuch) , zumurrud; Russ. izumrud.  
尚お, J. B. Hofmann: Etymologisches Wörterbuch des Griechi-  
schen, München 1950, p. 322 には σμάραγδος > Prakrt. maragada-  
Skt. marakatam, Lat. smaragtus にして, Hebr. bāreqet, Akkad.  
barrakta をも参照すべきも由来は不明とある。このほか Old Fr. esma-  
ragde, Old High Germ. Middle High Germ. smaragd があり, サム  
語系には Aram. barq<sup>ē</sup> tā がある。いずれにせよ, ここにわれわれは中世  
イラン語形を見出すことができる。シャーフナーメによると, 駒は象牙と

チーク材で出来ていたとある。

⑤ この部分の読み方はハンゼン氏上掲書 p. 14 によつた。

⑥ 原文には「不死なれかし。余が……」とある。以下にも散見されるが、王に対するときは「余」に代えるに「臣」の語を以てすることとした。

⑦ 近代ペルシア語形は Buzurgmīhr であるが、統一をとるために中世語形を用いる。従つて、シャーフナーメの場合でも、その近代語形シャトランジュ (šatrang) の代りにチャトラング (čatrang) を用いる。

⑧ Ferdowsi's Shahnameh edited by Saïd Naficy, vol. VIII, Teheran 1935 p. 2461f. (以下 SNT. と略記) および Histoire des Rois des Perses par Tha' alibī par H. Zotenberg, Paris 1900, p. 622f. (以下 Tha' alibī と略記)。

⑨ S. Wikander: Feuerpriester in Kleinasien und Iran, Lund 1946, p. 164, c. n. 3.

⑩ E. Herzfeld: Archaeologische Mitteilungen aus Iran III/1 (1930) p. 28~Zoroaster and his World, Princeton 1947, p. 627 参照。氏によれば Nēv-Artaxšēr > Nartaxšēr > Nart/Nard.

⑪ J. C. Tavadia: Die mittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier, Leipzig 1956, p. 140.

## 謝 辞 と 報 告

加 藤 一 朗

昨夏本研究会から派遣されて田中 琢(考古学専攻)、高林藤樹(東洋史専攻)の両君と行いましたイラン及びアラビアの調査旅行は、夏休を利用したもので期間も短く資金の面でも決して十分なものではありませんでしたが、それにも拘らず本研究会顧問の諸先生、会員諸兄、その他の方々から有形無